

途 中 の 旅

— 韓 国 ソ ウ ル —

榎 本 福 寿

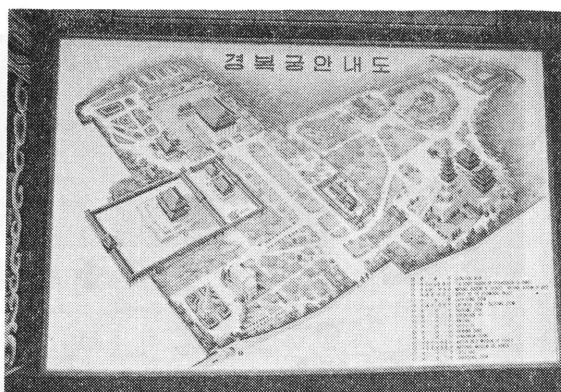
飛行機に乗るのは始めてだ。しかも大海を越え、その彼方の国まで飛ばうとしているのだ。いささか大袈裟になった。シートベルトを締め直し、エンジンの振動に耐えながら、友人の話を思い出していた。

彼は人間なせ生きるかに悩み、その解答を得られずに死を選んだと言う。死を前にしてまで彼は思索を放棄することがなかったが、死と向いあったその刹那、ふと新たな疑問に捉えられた。存在についてその解答を引き出せないと断じる前に、問いの形式に問題がなかったか、それをもう一度点検してみる必要があるのではないか。その必要に迫られて自殺をしばらく見合わせたというのが彼の弁疏の言であったが、この話の中の人間を飛行機に置き換えているうちに、突然、飛行機が離陸体制に入って猛烈なエンジン音を轟かせ始めた。こちらの体制に順着しない。爆音をさらに高くして、スピードをあげる。飛行機は、人間は、存在は、などがむしろに考えを纏めようと、懸命になつて体制固めしかかった途端に、飛行機はとびあがるように宙に浮き、そのまま混乱したわが思考もろとも飛行状態に移っていた。

文明は、それに与る者の個人的な事情にこ

だわらない。ひとたび文明に参加するや、文明の原則が超越的に働いて、有無を言わせない。個人は、押しなべてそれに身をゆだねるより外ない。まさに賢愚なしといったところだ。我が運命共同体の面々は、眼下に開ける大阪湾の景色に喝采したり、間もなく出された昼食をほうばったり、話にうち興じたりで、文明にすっかり乗りきっている。まさに満喫している様子だ。なるほど文明に対して雑念は無要なものかも知れない。頭の中の混乱より、目の前のおいしそうな機内食の方がよほど好ましい。飛行機は快適に飛ぶ。何の雑念が要るだろう。

飛行機は一路韓国に向う。けれども、そこが目的地というのではない。ソウル経由なのである。旅する先はアメリカ合衆国だ。ことの次第は、discountと称して大韓航空のアメリカ便を安売りしていて、それに飛びついた、なんのことはない、バーゲンセールを利用しているのだ。妻と二人。少々の遠回りと思いきや、ソウルの金浦空港に着いて税関吏に申し込むと、半日の滞在ビザをあっさり発給してくれた。恐らくそのように仕組まれている



景福宮全景図

のであろうが、ともかくもアメリカ便の待ち時間をソウル市内の観光にあてることができ
るのだ。税関吏の印象はすこぶる好い。

さっそく空港ターミナルに向う。ゲートを出て驚いた。送迎の人ばかりが異様な熱気を放ち、あまつさえ、そこからニンニクの異臭がただよってくるのではないか。さすが異国と

いうのがこの国の第一印象であったが、しかしこれは決して悪くない。ターミナルでは日本人旅行客のいずれも華美な服装が目立つ。韓国の人々は、むしろ身なりというべきであるが、概してつましい。民族服姿もその間にあって、違和感を抱かせない。ニンニク臭こそ、この国の大地に人々が生づいているその個性ある発現であり、それこそ民族色豊かな歓迎なのだ。悪いはずがない。

案内所で市内地図を貰い、ドルをいくらかのウォンに換金して空港を出る。タクシーが列をなして並んでいるが、そのどの車にも冷房がない。日中の陽ざしがきつい。客待ちの運転手は胸をはだけている。バスに乗った。しばらく車窓から眺めていると、人の様子がことに注意を惹く。こちらの空港専用のより一段と粗末なバスに乗った人々の、そのどの表情も生気に満ちている。そのバスも、行きかう車も、夏の炎天下に窓をいっばいに開けて、活気をみなぎらせて走っているようだ。そこそこに見かける人も、貧しげだが、なにやら忙しそうに見える。どうやら、この国はいま普請中らしい。バスが行く先々に、建築中の建物が少なくない。ソウル市内を流れる漢江でも、架橋工事が進められている。

市内には徳寿宮・景福宮・昌徳宮などといった李朝の遺蹟があって、観光には事欠かない。目抜き通りとおぼしき繁華なところでバスを降りる。近くにはソウル市庁舎があり、それと道路をはさんで向いあった木々の繁った一画があり、そこが徳寿宮だ。京都御所の半分程の敷地に古く壮麗な建物が並び、周囲の喧噪をよそに、いかにも閑寂なたたずまいが歴史を物語っている。

見物する者など殆どいない。閑散とした中をゆっくり見回っていると、初老の女性が近寄ってくる。粗末な身なりで、素足にサンダル履きだ。行き過ぎようとして振りむきざまに、話しかけてきた。この関係者だと言って、案内を買ってでる。流暢な日本語である。げんそうに應じると、勝手に案内し始めた。丁寧にデス・マスと使い分けて、笑みを断やさない。徳寿宮の来歴、韓国の現況、暮しのことなど、さらには、かつての日本統治時代のことまで話す。その一つ一つに頷き、おし売りの説明を少しく苦痛に感じながら聞いていると、日本語を統治時代に習い、その頃は楽しみより苦勞の方が多かったなどと、自らの過去に触れて語る。その言葉の端々に、いとおしみと共に深い嘆息が窺われる。それと

知られまいとするけれども、笑顔が時に翳る。過去の暗さは、帝国日本がその核となっていくからでもあるのか。それが純朴なこの韓国の女性の心のどこかに燦り続けているのだろうか。そんな思いを反芻しながら、成寧殿



景福宮勤政殿前にて

・中和殿とめぐるその間ずっと、足元のサンダルがまるで過去を引きずるものでもあるかのような錯覚に捉われていた。

その錯覚は、しかしながら、別れ際にもろくも打ち砕かれてしまった。この女性が名産

の紫水晶をあれこれ品を替えて執拗に売りつけるのだ。けれども過去の感傷におぼれかかっていたそのせいか、売りつける様がどこか痛々しい。剩え、生活のかかった仕事に精を出している心算なのであるが、押しの強さならぬ、それとうらはらな奥床しさがこの女性には仄見える。日本ではすでに死語になるうとしているそうした過去の美德に生きることが、もはやこの国の時代と環境が許さないのであろう。同情で買うことの無意味さを思っ、何一つ買おうとしなかったが、別れの挨拶をかわしたその時の悲しそうな顔が今

も浮かんでくる。

徳寿宮から景福宮まで凡そ一キロ程、この間を南北に走る世宗路は、市内で最も道幅が広い。その通りが北につきあたる正面には、いかつく古めかしい中央庁のビルが建ち、一方、政府綜合庁舎がその中央庁に相對して世宗路に面してある。この辺りが韓国行政のいわば中枢部なのである。にがい思いに駆られながら歩いていると、薄墨のような雲が動き、にわかにかき曇った空から雨滴が落ちてきた。と思う間もなく、雨が急に降り始めた。人々は、不意の雨に四散して、先刻までの殷賑な人通りがサッと跡絶えた。車が水しぶきをあげて行き交っているばかりだ。

雨は、しかし俄雨らしい。降り過ぎた彼方は、日が射して明るい。俄に見舞ったこの雨に官庁の建物が煙っているが、そのどの入口にも門衛が立っている。恐らく兵士なのである。銃を手に、二人が組みになって、入口の左右に直立している。そのだれもが、まだ若い。雨は、彼等にも容赦なく襲いかかる。兵士は身じろぎ一つしない。風が一施すると、煙るような雨霞が走る。兵士の剛然とした姿がその中に見え隠れる。

突然の雨は、また足早に通り過ぎていった。

強い陽光が戻り、往来はもとの活況を呈し始める。けれども、雑踏からあがる塵埃はすでに無い。半島特有の岩肌の露出した山々の稜線が鮮かだ。雨に濡れたその岩肌に木々の緑が映えて、それが間近に見える。日の光が一段と強い。ギラギラした日射しの下で兵士が立ち続けている。この兵士にとって戦場はどこなのだろう、いぶかしさが募る。道行く人の誰も、彼等に気を留める者がいない。

中央庁のビルが建っているのは景福宮の一面だ。宏大な景福宮の、それでも南の一部を占めるに過ぎない。入口には、旧時代を象徴する二層の光化門がある。景福宮をパンフレット（大韓旅行社発行）にはこう説明している。

朝鮮王朝五大王宮の一つで、太祖以来の王宮であったが、一五九一年の壬辰の乱で全焼、一八六七年に大院君が再建した。慶会楼、勤政殿、香遠亭などの建物が今尚残っており、華やかやし古を偲ばせる。

国立中央博物館もこの景福宮の一面にあり、四角の壇上に五層の塔がその威容を誇っている。韓国四千年の歴史を物語る八万余点の文化財を展示するというが、正巻は李朝の陶磁器類である。しかしその逐一には、改めて喋



景福宮内の一景

々するまでもないであろう。全てを見尽くす余裕もなく、退館の頃にはすでに夕色が濃い。

景福宮は市の中心からやや北に位置しているので、空港バスの乗り場まで戻らなければならない。もと来た大通りを避けて、裏通りに足を踏み入れると、表通りとは様相が一変する。軒をならべて様々な店が連なり、露店があり、そこを人々が蟻のようにゆきかっているのだ。勿論、車など走らない。それでも、日本の盛り場や観光地の人混みとは違う。雑踏

ではなく、人がそこで生を営むその活況なのである。その通りのあちこちに人がたむろしている。何かを口に入れたり談笑したりして、こちらが立ち止まると、げんな顔付きで一樣に見つめる。連中は暇をもてあましているのだ。かわってはいられない。汚れのひどい処や点在する雨水のたまったデコボコに気を配りながら歩き続ける。食堂が多く、そのどれもが汚れた店頭でアヒル（と思しき鳥）の丸焼きを拵えている。火であぶる。油がたれ、ジュージュー音を立て、うまそうな臭いが空腹をいたく刺激する。退社時刻もすでに過ぎていくらしく、会社員風の男達もそこに入っていく。その比較的に易い店を選び、店先に並べてある料理に添えられたハングル文字のメニューを丁寧に書き写し、さて勇を鼓して店内に入った。メモを渡して、通じたのかいぶかしみながら待っていると、無造作に注文の料理を置く。皿に大盛り。きまえがいい。しかし、これは

外国人への特別サービスなのではない。店をほぼ埋め尽くしている客のどの皿も大盛りなのだ。彼等はそれを互いに食べあう。幾皿かを囲んで、箸をつつき合つて食べる。

このような共同食の習慣は、どうやら中国でも同様らしい。話は前後するけれども、アメリカで足を踏み入れた三ヶ所のチャイナ・タウン、最初がシカゴ近郊、次にはニューヨーク市内、最後にサンフランシスコ市内のそれらいずれの所でも、中国系の人が数人で食事をするその仕方は、数皿の料理を皆で食べあうのを常としていた。祖国を遠く離れた、しかも出身地域の異なるそれら三ヶ所で同一習慣が守られているのだ。これは、この種の習慣の根強さを物語るものであろう。恐らく本国でも同様であらうし、とすれば、陸続きの中国と韓国とは、同じ習慣、同一の食の文化を共有しているわけだ。

海によって隔てられた日本はいえ、例えば一つ釜（火）の飯を喰う、あるいはかための盃などと、そのような共食のなごりがあり、そしてその由来も相当古く、かつて各地に広く及んでいたらしいが、それがもともと神事にかかわっていたように、やはり特別の行事に懸る風習のようだ。日本は、その日本

料理が代表する特別の食に関する文化を育んできたのではないか。その特別なとは、即ち個別（お膳に一人分）の方向と言い換えることもできるだろう。アジアの中にあつて、日本がいち早く西洋化に應じ得たことについて、こうして食という人間生活の基本からして久しい個別化の歴史をたどっていて、すでにその下地があつたことも一因となろう。反面、それだけに個我的懐悩もまた西洋に触発され易い。近代の文学者がこぞつてそこに題材を求めたのも、かかる勢と無縁ではないであらう。戦後の人間疎外や核家族化も、あるいはその必然的な流れなのかも知れない。

この国にも、そのような問題が無いとは思えないが、こと食事から判断する限り、日本の場合とよほど異なるものであるに違いない。人々は楽しげに、一齊に食べかつ喋る。彼等の食事は、さながら話をおかずにしているようだ。日本料理の食事作法など、まさに養喰えなのだ。

食べ残しては失礼とばかりに無理して押し込んだお蔭で、幾分苦しくなったが、休んでいる暇がない。食堂を出ると、夕闇が濃く、人々の数がさらに増えている。ネオンも余りない。その暗がりに行き会ふ人の表情は、ど

れもそこに充足している感じだ。この国が現在も戒厳令下にあるとは思われない。勿論、昼間大通りで見たあのよそよそしい表の緊張などない。兵士が自らの武装を解き、生を充填するのは、恐らくこんな処なのであろう。彼等を強いる何ものも無いのだ。

ところが、繁華街に出た途端に、一種異様な感覚に襲われた。日本の都会の夜の雑踏をそのままさがら移した光景だ。着飾った男女が行き交ひ、華やかに装いを凝らした店が並んでいる。そんな中で、朝鮮人蔘の専門店がわずかに異国をそれと知らせるばかりだが、それとて、ショーケースやガラス壺の中で光に漂白されているように見える。それらの店にあふれる照明が、ネオンが、街灯の光がまさにまばゆいばかりだ。立ち止まるくらいでは、誰も見向きもしない。よそよそしが街全体を包み込んでしまっているようだ。ここはもはや寛ぎの場所ではない。異邦人。この言葉が思わず口を突いて出た。

空港に戻って、さっそくアメリカ行きの機内に乗りこむ。ソウル発二二時三〇分、同日の二〇時二〇分にロスアンゼルス着の予定だ。

一日もうける勘定になる。それにしても、このまま夜を飛び続けて、夜の長さは一体どうなるのだらう。とりとめもない考えに促われないがら出発を待つが、定刻を過ぎても飛び発つ気配がない。機内食の夕食が配られる。食べ終えた後も、何の連絡もない。そのうちに機内放送で韓国人の名前が呼ばれて、幾人かが機外に出た。それが二三度あった。不安が募る。KCIAの連行かなどと勝手な想像をめぐらしていると、今度は、整備服の男が数人乗り込んできて、機内の左前方に備え付けの荷物ケースを調べ始めた。すわ爆弾と思いきや、調べているのは荷物ではない。故障のようだ。

ジャンボ機の広い機内が俄かに騒がしくなった。もはや飛び発てる状態ではない。中国系と思しき中年の男が係員に向かって早口の英語でまくし立てている。何万ドルの損だとか何か言っているらしい。よく分らずに聞きながら、その激しい異議申し立てに、久し振りに熱い連帯の意を表明したい心境になった。金には無縁とはいえ、こちらにも心配が無いわけではない。出発が遅れば、ロス着は夜中になりかねない。ホテルが取れるかは保証の限りではなくなってくる。不安と諦めの

混じった乗客の表情は、一様に疲労の色が濃い。そんな中でも、前の座席に陣取ったカナダ人の団体旅行グループだという者達は陽気だ。運動だとはかりに、じゃれ合っている。日本人も幾人か見受けられるが、勿論、騒いだりしない。プチプチ不平でも言いながら、計画の見直しでもしているのであろう。他のアジア系の人達は概しておとなしい。空調の工合でも悪いらしく、むし暑い。すでに十二時を回っている。突然、放送でこの機の故障が報じられ、今晩はとりあえずホテルに止宿することを知らされた。

外は雨になっている。闇を突いてバスが走るが、その行先は分らない。驚いたことに、昼間あれ程往來の激しかった通りに一台の車も走っていない。闇に降りしきる雨と、その彼方に小さく霞んでいる街の明りとが見えるばかりだ。

突如としてバスの行く手に光が揺らいだ。検問だ。広い通りが遮断されている。外出禁止令が出されていることを咄嗟に思った。銃を肩からさげた兵士がバスの前照灯に照らされて浮かびあがる。数人がバスの前に立ちはだかり、そのうちの一人が運転手に何かを提示させて調べる。不気味な雰囲気バスを包

む。雨が小止みなく降り続けている。重苦しい緊張の後、ようやく解放されて走り出してからも、幾度か同様の検問を受けた。行く先の知れないバスは、闇を永遠にさまようかのように、右に左に方向をかえて走り続ける。もはや誰も喋る者はいない。

疲れきったその果てに、小高い丘に建つホテルによく辿り着いた。二時になるうとしていた。文明がその原則を乱し、そこに参加した人間の蒙ったものは、ともかくも重い重い疲労であった。けれども、その乱れによって明日に蒙るものはこれに留まるであろうか。文明への検証は、依然として無用ではないのかも知れない。友人の話が俄かに現実味を帯びてくるのを覚えた。

(えのもと ふくじゅ 文学部専任講師)

